

点描28 網干郡代 石川一格船荷物漂流 その1

文政3年(1820)正月10日朝、70石積の船に百余品を積み込んだ船が、四国丸亀を目指し西へ向かった。船荷は網干郡代石川一格の引越し荷物が満載されていた。一格とは号で本名を藤太夫といい文化3年(1806)着任以来、文政3年(1820)浅香荘左衛門氏との交代まで郡代をつとめていた『網干町史』。次回では石川一格について分る範囲で述べたい。

昼九ツごろ(昼12時)瀬戸内沿いの備前邑久郡犬嶋沖(岡山県岡山市東区犬島)へ差しかかる
と、雨雲の影さえ見えなかった海上に突然強い東風が起こり煽られて船は横倒しとなった。船頭新右衛門・加子半右衛門・市蔵・上乗り斉藤利藤太(警護役)の四人は海へ投げ出され、積み荷は海上を漂い沈む。運よくその場を通りかかった犬嶋の者たちが、小船四艘に乗り込み救助に向かう。これは幕府が元和7年(1621)8月「海難救助・海難処理法令」を出した三条の内の一つに、(廻船の遭難時の救助指示)いわゆる人命救助第一条に沿うもので、幸運にも助け上げられた四人は、手厚い介抱を受け九死に一生を得た。

実はこの遭難について三枚の異なる文書「書物之事・忒通」「裏手形一通」が残され、網干町史には簡単な解説文が載せられている。「書物之事一通」には漂流する船と船具類が記され、これらは犬嶋の者の手助けにより拾い集められ、急報で興浜浦庄屋岡部猪平ほか四人が駆け付け、犬嶋五人組頭仁左衛門と名主拾吉立会で、(廻船之作法)により事後処理を終えた。

回収した船具類は、船一艘 とも綱壺ツ 一斗櫃 小戸四枚 水桶壺ツ 櫓三挺 篋板数々 帆柱壺本 帆桁 帆七反其俣 梶 つか壺本 梶壺 水縄壺筋 藁綱忒筋 鉄碇壺 橋船壺艘 あゆみ板壺枚 夜着布団大小八 つかい壺組 〆て拾九品。

現在津々浦々に流れ着くゴミ、隔世の感に打たれる。嘆いているのは海だけではあるまい。

網干歴史講座会員 垣内 田中早春



網干から犬島辺りで南下高松港へ (肥塚昭子氏作図)